

文化が伝播し変容していく中で失われてしまった音を発掘する。



「コンサート ジェネシス IV」(左より) アングルハーブ、リュート、アウロス

今は使われていない始原楽器と呼ばれる楽器が世界中に存在する。演奏会で使いにくいという意味合いから切り捨てられた始原楽器には「失われた音」が存在するという。こうした楽器を復元し、失われた音を取り戻して新たな音楽の方向性を探るといふ音の発掘作業が進んでいる。

古の楽器は、調律無しで演奏されていた。

「正倉院」というと多くの宝物が保管されている場所を想像するかもしれないが、実はすでに使われなくなった、文字通り「お蔵入り」のものが収蔵されている。その中には現在では伝わっていない楽器も多く含まれている。それらはパーツ毎にバラバラに保管されているため、奏法はおろか組み立て方すらわからないものも多いという。

京都造形芸術大学 芸術学部教授の木戸敏郎さんは、こうした古代の楽器の復元に長く携わってきた。

「楽器はより大きな音と取り扱いのよさを求めて進化してきました。持ち運びに不便とか音が小さな楽器は、演奏会には向きません。このために切り捨てられた楽器や『音』がたくさんあるのです。それらを始原楽器と呼ん

でいますが、不要な音ではなく、音の情報量を豊富に内包している貴重な原種なのです」と語る。

木戸さんの研究目的はその原種を現代によみがえさせることだ。以前、木戸さんは正倉院の箜篌(くご)と呼ばれる楽器(西洋のハーブに近い)を復元したことがある。その過程はまるでシャンポリオンがヒエログラフを解明したように、ワクワクするような謎解きに満ちている。誌面の都合上ここでは紹介できないが、そこで気づいたことは、当時この楽器は調律しないで使用されていたということだった。演奏のたびに音程も変わっただろう。構造的に弦を強く張れないから、音は小さくなる。その代わりに1つの弦をつま弾くと、隣やまたその隣の弦が共鳴するようなくみになっている。音楽的にいうと「倍音」が多く含まれ、自然に近い音ともいえる。

木戸さんによれば、現代の音楽は五線譜や平均律という枠の中にとらわれたものである。音楽の再現性や楽器の調和を考えればメリットはあるが、その反面不都合な情報は削られてしまった。今、こうした音楽を評価し、失われた音を取り戻し、新たな音楽の方向性を探るといふ研究が盛んになってきている。この目的で始まったのが「コンサート ジェネシス」だ。ジェネシスとは始原とい



復元したエジプト古代楽器を解説する木戸敏郎さん

う意味である。

コンサート会場に響く始原の音たちが、現代人が失った何かを呼び覚ます。

第1回目のコンサートは2005年に「文化の伝播と変容」というタイトルで行われた。周知のように楽器もエジプトを起源にシルクロードを渡ってきた。その間、原則的な構造は守られながらも、地域性などの影響を受けて変化してきた部分もある。例えば、ハーブの弦が牧畜地域ではガット(羊の腸)になり、農耕地域では絹が用いられるという具合だ。木戸敏郎さんは正倉院の箜篌の復元を皮切りにルーブル美術館のエジプトハーブの復元にも成功した。その後も次々と世界各地の始原楽器の復元に成功しているが、その過程で強く感じたことが「文化の伝播と変容」というテーマだったのである。

コンサートは翌年から「コンサート ジェネシス」の名称となり、その第4回目となる今回は2009年11月21日に京都造形芸術大学内の春秋座で、また12月5日には岡山県倉敷市大原美術館で開催された。

春秋座公演の第1部はカイロ美術館にある古代エジプトリュートを復元し、アングルハーブとアウロスとあわせてみるという試みだ。3つの楽器はそれぞれ音を出す仕組みや構造が違い、また音の情報量や音列がまちまちである。演奏はそれぞれの自然音律を重視して行われた。

第2部はアメリカ実験音楽の大家、ジョン・ケージ作曲のRENGA(連歌)である。五線譜ではなく楽器を特定しない図形楽譜で作曲されたこの曲は、音楽ではなく、楽器そのものの音を抽出して味わうというコンサート

担当者より



日本が世界の音楽文化に一石を投じた事業だと考えます。

京都造形芸術大学 芸術学部 教授
木戸敏郎さん

日本の正倉院は世界に誇れる文化遺産です。それがないければエジプトの始原楽器も復元できなかったかもしれません。そして雅楽は始原的な音の再現に適した文化だといえます。今回の試みは日本だけからなした世界の音楽文化への大きな貢献であり提案でした。またAJOSCのご支援の賜物であると考えております。



「コンサート ジェネシス IV」RENGA(連歌)を演奏する様子



古代エジプトリュートを復元(CG図)カイロ博物館所蔵

ジェネシスのコンセプトに合致したようだ。

どんな音だったのか知りたいところだが、残念ながら「CDのようにデジタル処理をして音を聞いているメディアでは伝えられない音」だと木戸さんは語る。

失われた音の発掘は、現代人の心から失われた何かを呼び覚ます手段になりそうな気がしてならない。